

---

---

## 6 学会結成の経緯

---

---

野中 猛

### 1 はじめに

1995年11月18日、幕張にある海外職業訓練協力センター（通称OVTA）にて、「日本精神障害者リハビリテーション学会」が設立された。本学会は、精神障害をもつ人々のリハビリテーションにかかわる幅広い方々が一堂に会して、その実践と理論を交流し、その質を高める機会として、多くの方々から望まれていた場である。その前身は、1993年11月27日～28日に開催された「精神障害者リハビリテーション研究会」第1回研究合宿にある。そのための準備活動から筆を起こして、ここに公的な記録として残すことにしたい。

### 2 第1回研究合宿まで

#### (1) 最近のわが国の状況

1981年の「国際障害者年」とそれに引き続く「国連・障害者の十年（1983～1992）」は、精神保健にかかわる専門家以上に、その周囲の人々、関連する他領域の専門家、多くの国民に多大な影響を与えた。精神障害は分かりにくくて難しそうでも、「障害」という部分で共通点が得られそうな雰囲気になったのである。この流れは、1988年の「精神保健法」改正、1992年の「障害者の雇用の促進等に関する法律」一部改正、1993年の「精神保健法」一部改正と「障害者基本法」成立、そして来年度に予定される厚生省「障害保健福祉部」の新設へと結実した。精神障害をもつ人々への支援は、精神病院から社会復帰へ、さらに障害をもつ者自身の社会参加へと、わが国でも歴史は確実に流れていることを実感する時代である。

この流れにともない、まだまだ量も質も不十分ながら、精神障害をもつ人々のためのリハビリテーション支援活動に従事するさまざまな分野の人々が確実に増加している。しかし、リハビリテーション活動は実に広い領域を対象とするため、医療、保健、労働、教育、社会福祉、心理、作業療法など、それぞれの領域の中だけ、もしくは関連した領域だけでの交流と議論が、分散してなされていたのが現状であった。これを精神障害をもつ人々の側から見れば、支援に一貫性や責任性を欠いていることになる。このことは、一概に縦割りの行政だけに責任があるのではなく、専門家としてのわれわれにも思想的かつ技術的な統合が求められていると言える。

一方、各地のデイケア連絡会、社会復帰施設連絡協議会、共同作業所全国連絡会など、立場を同じくする機関同士が複数の連絡会を設けており、日本病院・地域精神医学会、日本社会精神医学会、日本職業リハビリテーション学会など、対象を少しずつ異にする学会活動が展開している。当事者自身も、1965年結成の全国精神障害者家族会連合会（全家連）、1993年結成の全国精神障害者団体連合会（全精連）が貴重な活動を展開している。リハビリテーション支援活動を実践している専門家は、当然の必要性から実に多くの団体に所属したり協力したりしており、それらの調整と統合に関する時間と労力は各自の臨床実践に過剰な負担をかけ始めている。いまや、多くの職種や機関を超えた情報交換と統合の場が望まれているのであろう。

## (2) 研究会の発端

それ以前から、わが国の技術的指導機関である国立精神・神経センター精神保健研究所における研修会において、その講師や受講生の中で、精神障害に対するリハビリテーションについて継続した経験交流と議論をする場を望む声があがっていた。一方、わが国の精神科リハビリテーション活動において先駆的な実践をしてきた公設精神科リハビリテーション施設連絡協議会の側も、公設の枠を越えた交流の必要性を求める声があがっていた。

1992年の暮れから1993年の正月にかけて、東京武蔵野病院の蜂矢英彦先生や埼玉県立精神保健総合センターの渡嘉敷暁氏の励ましを得て、意見をともにした国立精神保健研究所の丸山晋氏、藤代健生病院の蟻塚亮二氏、東京都立中部総合精神保健センターの見浦康文氏、埼玉県立精神保健総合センターの野中猛が何度か意見を交換した。さらに中部センターの見浦氏に代わって高畑隆氏、東京都立精神保健センターの伊勢田堯氏、国立精神保健研究所の丹野きみ子氏を加えて事務局を形成して提案の骨子をまとめた。作業は、全国の関連する専門家に向けて研究会の準備委員をお願いすることから始められた。委員には、実際に発想し準備していただければならないので、すでに精神障害に対するリハビリテーションを実践し、全国各地で活発に活躍しておられる若手の方々を対象とし、計44名に呼びかけた。

呼びかけの以前から、時期尚早という意見、新たな学会ではなく日本リハビリテーション学会や日本社会精神医学会の分科会にするべきという意見が出されていた。しかし、精神障害をもつ人々のリハビリテーションについて、幅広く実質的に議論する場を望む声は確実にあり、その声や力をまず聞いてみる場を設けようという立場で、その後の会合を繰り返している。この立場は原則的にいまでも変わらず、学会は参加する人が作りあげるものであり、その必要性がなくなった時には存続の意味もないも

のと考えている。

1993年3月17日夜、上野の東京都立精神保健センターにて「精神障害リハビリテーション研究会」第1回準備委員会がもたれ、全国から20名の方が参加した。この時は主に研究会のイメージを調整することが課題となり、その存在の必要性は異論なく共有され、名称は「精神障害」か「精神科」か「精神障害者」か、当事者を対象に含むかどうかなどが議論された。当面の活動資金はメンタルヘルス岡本記念財団活動助成金を受け、この時に得られたアンケート調査は丸山<sup>1)</sup>によって報告された。第2回準備会は4月28日にもたれ、名称を「精神障害者リハビリテーション研究会」と決定し、秋の研究合宿のイメージ作りと、学会移行に関する意見交換が行われた。

### (3) 第1回研究合宿の開催

研究合宿の構造と内容は、事務局の提案を受け、第3回準備会でほぼ決定された。各分野の到達点と課題を互いに紹介し、事例に基づいて十分に討論したいという方向で検討された。大テーマは「精神障害者リハビリテーションにおける自由性と課題性」に収斂した。中テーマとして「デイケアから見たリハビリテーション」があげられ、東京大学の宮内勝氏と本庄幾代氏、国立精神保健研究所の松永宏子氏と栗原毅氏に話題を提供してもらい、他に小テーマとして「地域生活者の自立と自活をめぐる」と題して、クボタクリニックの窪田彰氏と障害者職業総合センターの倉知延章氏にそれぞれの実践を話題として提供してもらうこととなった。

1993年11月27～28日、千駄ヶ谷の日本青年館にて「精神障害者リハビリテーション研究会第1回研究合宿」が開催され計72名が参加した。十分な意見交流をする意図と会場の都合で、第1回は対象を会員の紹介によるセミクロズドとした。

この会では、指示と自己決定、状況や場面の差、能力評価の是非、生活する技能などについて議論が発展した。さらに休憩や宿泊の間に多くの交流がなされた。具体的な討論内容については研究会報告書No.1を参照されたい。またこの研究合宿については、高畑<sup>2)</sup>や野中<sup>3)</sup>が紹介している。

## 3 第2回研究合宿の開催

1994年第1回準備会は1月31日にもたれ、研究合宿の感想と今後の希望が話され、第2回研究合宿はOVTAで開くことが予定され、その後具体的な準備が重ねられた。他に高畑氏の研究会会則案がこの段階で提示されている。

第2回合宿では、好評であった枠組みを踏襲し、内容は第1回合宿で出された課題に沿うこととなった。最終的には、基本テーマである「障害へのアプローチ：その実践

的課題」の下に、第1セッションでは、「これからのデイケアに求められるもの」と題して、帝京大学の池淵恵美氏が内外の文献総説を、東京大学の安西信雄氏がデイケアのガイドラインに関する事柄について話題提供し、第2セッションでは、「職業レディネスについて」と題して、宮城県立名取病院の猪股好正氏が医療側から、障害者職業総合センターの松為信雄氏が職業側から話題を提供し、第3セッションでは、「単身生活のサバイバルスキル」と題して、藤代健生病院の蟻塚亮二氏が長期在院者の障害論とスキルについて、全家連作業所の斎藤潤子氏が地域生活のニーズに基づくスキル獲得の方法について、それぞれ話題提供することとなった。

第2回研究合宿は、1994年11月5～6日、雇用促進事業団海外職業訓練協力センター(OVTA)にて開催され、オープンに参加を求めたところ140名の参加者となった。具体的な討論内容については報告書No.2を参照されたい。なお、この段階から本研究会は日本障害者雇用促進協会の研究助成を受けている。

## 4 第3回研究合宿が学会大会に移行

### (1) 第3回研究合宿の内容

1995年の第1回準備会は2月17日にもたれた。報告集発行の進捗状況が議題となり、第3回研究合宿のイメージ作りがなされた。最終的には、時期と場所は第2回合宿を踏襲し、内容については、一方で初心者のために研修的要素を入れようとワンポイントレッスンを試み、他方では中核的な議論である「障害構造論」に取り組むこととなった。話題提供はシンポジウム形式で「生活支援」と「就労支援」の二つを小グループに分けて十分議論することとした。

ワンポイントレッスンは、住居プログラムについて群馬大学の小川一夫氏、職業リハビリテーションについて職業能力開発大学校の館暁夫氏、ケースマネジメントについて埼玉県立精神保健総合センターの野中猛が行う。シンポジウム1：在宅支援は「地域生活支援の様々な展開」と題して、東京都立大学の大島巖氏、横浜市精神障害者地域作業所連絡協議会の大友勝氏、世田谷区福祉事務所の藤間久子氏、東京武蔵野病院の佐藤美紀子氏が話題提供し、シンポジウム2：就労支援は「医療機関から労働機関・事務所へのアプローチについて」と題して、浅井病院の鈴木洋子氏、JHC板橋の寺谷隆子氏、東京大学の友沢万里子氏、晴綾リハビリテーション学院の平賀昭信氏が話題提供する。パネルディスカッション：「精神障害領域における障害構造論－精神障害を他の慢性疾患と同様に捉えることが出来るか」は、帝京大学の上田敏氏、日本社会事業大学の佐藤久夫氏、みさと協立病院の中澤正夫氏が話題提供し、京都大学附

属医療短大の山根寛氏が指定討論を行うこととなった。

## (2) 学会移行の経緯

一方、学会移行に関する議論は意見が一致しないまま先送りとなっていた。本来の目標である学会移行をこれ以上送らせるべきではない、研究会では出席しにくいなどの賛成意見と、実践現場と離れてしまう、存続する責任ができてしまうなどの反対意見が出て、一時は学術集会という妥協案も提案された。その頃、別に呼びかけられた「日本デイケア学会（仮称）」の再検討という事態も微妙に影響を与えたと思われる。

秋頃になって、会則案、事業案、予算案、趣意書などを具体的に検討する中で、次第に、今の情勢で学会に移行しなければ機会を逸する、むしろ学会の形で新たな人々の意見を集めようという意向に固まってきた。時間は押しつまっていたが、急きょ、組織案決定とその人選が開始され、事務局を中心に会長、副会長、代表理事、顧問、理事などの交渉が行われた。顧問と理事の方々には誠に失礼であったが、時間の関係で、提案と承諾、意見交換というやり取りを2回しか行えなかった。

役員の構成について、一方の意見では、若手を中心に歴史にとらわれることのない新風を巻き起こすべきという流れと、各領域で実践されている多くの方々を集めるべきという流れが、意見の対立とまではいかなくとも、背景にあったように感じられる。最終的には、より多くの方々に呼びかけようという路線で、各領域や各職種の代表となる方々に顧問や理事をお願いした。さらに、全国の各地域にリハビリテーション活動を広めるために、特に各地域の代表となる方々を加えた。一昔前に比べて、候補となるべき人々の多さにあらためて感慨をおぼえる。しかし、一方で候補となるべき人のすべてに声をかけることは不可能であることを知った。今後の自薦推薦によって理事を加えていく一方、実際の学会運営は関東近県に住む理事が運営部会を設け、地方を含む大会の運営は大会担当小部会を設ける形を工夫したい。

## (3) 第3回研究合宿と学会設立総会

1995年11月18日～19日、幕張OVTAにて、第3回研究合宿が開催された。参加者は計260名にのぼった。大きな波乱もなく無事にその日程を終えた。その具体的な内容は報告書No.3を参照されたい。

18日昼に、蜂矢氏や渡嘉敷氏を初めとする役員候補者が集まり、最終的に学会設立の意向と総会議案を確認した。引き続き、大会場で学会設立総会が開催された。松為氏の司会のもと、経過説明と趣意書に関して丸山氏、会則案や組織案に関して伊藤順一郎氏、役員候補選出に関して野中が説明し、役員選出方法や他学会との異同に関す

る若干の質疑応答の後、学会設立が拍手で承認された。さらに引き続き、第1回会員総会に移行し、蜂矢会長と渡嘉敷代表理事のあいさつがあり、今年度および来年度の事業計画について丸山氏、同じく予算案について相澤欽一氏が説明した後、拍手で承認された。

今後、1995年12月に第1回の運営部会が開かれ、1996年2月に第1回の理事会が開催される予定である。将来的に多くの方々が会員や理事に加わり、運営や大会に参加することによって、本学会が適切な形と有意義な内容に育っていくことが期待される。

## 5 会員にこれから望まれること

設立趣旨にあるように、学会は会員自身作りがあげられるものであり、学会運営をはじめとするそれぞれの事業において積極的な参加が望まれる。しかし注意すべきは、リハビリテーションの場合には多職種、多領域、多分野の人々が一堂に会するため、言葉や概念、価値観や役割がそれぞれに異なる点が前提としてある。相手の立場に立っていねいで分かりやすいコミュニケーションによって、多分野協働の豊かな創造性が生まれることを期待したい。そのためにも、精神障害をもつ人々に役立つ立場こそが共通のものであることを確認しておきたい。さらに、そうしたリハビリテーションの基本的構えが、初心者にも自然に伝わるような学会の雰囲気を保ちたいものである。(1995年11月25日)

## 参考文献

- 1) 丸山晋：精神科リハビリテーション協議会の運営に関する活動 メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告書、5：337 - 339、1992.
- 2) 高畑 隆：第1回精神障害者リハビリテーション研究会. リハビリテーション研究、No.79、1994.
- 3) 野中 猛：第1回精神障害者リハビリテーション研究会開催. ぜんかれんREVIEW、No.7、1994.

資料1：「第1回精神障害者リハビリテーション研究会のお誘い」1993年8月16日発原文

資料2：「日本精神障害者リハビリテーション学会設立趣意書」1995年10月1日発原文

資料3：設立当初の運営部会構成者 1996年2月10日決定